



住民意識調査から開田高原の草地保全を考える

木曾馬で有名な開田高原ですが、かつては馬の餌を採るための草が山の上まで広がり、そこでは火入れや草刈りなどの管理が続けられてきました。馬の飼育が衰退した現在では採草利用はほとんどなくなりましたが、害虫防除や景観維持の目的で各集落の周辺などで火入れが続けられています。開田高原の美しい農村景観は、こうした地元の人たちの営みによって維持されてきた部分も大きいのではないのでしょうか。また、開田高原は草原性の希少な動植物が多く生息していることでも知られています。しかし、草を利用しなくなった現状で草地の管理を続けていくことは地元の人たちにとって大きな負担です。過疎化や高齢化が進むなか、今後の管理をどうしていけばいいのか。全国の里地・



木曾馬とニゴ

里山地域にも共通する難しい問題です。

開田高原の住民の方を対象に2021年から2022年にかけて環境保全研究所が実施した意識調査では、開田高原の自然は豊かだと思うと回答した人が88%もいました。一方で、10年前よりも貧弱になったとの回答も36%ありました。比較的若い人に多い傾向がみられ、開田高原の自然の変化に危機感をもつ人がある程度いることがわかりました。木曾馬がいる風景に対しては、親しみを感じると回答した人が93%もいました。同様に、ニゴ（干草を作るために刈った草を積み上げたもの）については67%でした。両方とも高齢層でより親しみを感じている傾向がみられ、木曾馬飼育やニゴ作り経験の有無と関係していると考えられました。また、火入れや草刈り、ニゴ作りなどが、地域の文化であると思うと回答した人が87%もいました。単なる農作業を超えた地域独自の文化としての共通認識があるのでしょうか。

一方で、草地の保全・活用への協力に対しては、「とてもいいことだと思うので協力したい」と回答した人が53%いました。若年層でより協力的な傾向がみられ、80代以上では高齢のために協力できないとの記述も多くありました。保全活動へ参加する際の条件としては、近くて気軽に行ける場所をあげる人が多く、若年層では活動にかかる時間や費用を重視する傾向もみられました。このように草地の保全・活用に対して協力的な意向を持つ住民が潜在的にかなりいることがわかりましたが、ボランティアでの作業を求める際には、これらの条件を考慮する必要があると考えられました。

この調査では年齢層による意識の違いもみられましたが、80代以上の回答者のうち7割は開田高原地区外での居住経験がありませんでした。木曾馬飼育を含む農林業を中心とした暮らしを営んできた世代だと思われる。逆に60代以下は地区外での居住経験者と地区外出身者がほとんどであり、木曾馬やニゴに対する思いはそれほど強くないものの、保全に対しては協力的な意向をもつことが確認できました。木曾馬飼育の経験者が高齢となるなか、その経験に基づく知識や思いと若年層の活動参加意欲をつなげる仕組みが必要ではないかと考えられました。また、環境保全の視点だけでなく、木曾馬をキーワードに地域の文化の視点も加味することで、単なる草刈作業を超えた新たな展望が開けてくるかもしれません。何れにしても、全国的に貴重な開田高原の自然を未来に引き継ぐために、行政も含めて地域内外のさまざまな関係者が力を出し合うことが必要ではないのでしょうか。

(畑中 健一郎／自然環境部)



希少な動植物が生息する草地での草刈り作業

